

正規雇用と非正規雇用の間には、賃金をはじめ労働時間や雇用の安定性、福利厚生など様々な面で格差のあることが指摘されています。非正規雇用の増加によって日本の賃金格差が拡大したことを指摘する研究もあります。

これまであまり注目されませんでした。正規・非正規雇用間の就業する時間帯にも格差が生じていることを指摘できます。早稲田大学の黒田祥子准教授と筆者の共同研究

## やさしい経済学

### 雇用を考える

#### 増える非正規雇用

9

に基づいて説明しましょう。  
 図は総務省の「社会生活基本調査」を用いて、男性の非正規雇用の平日（月～金曜日）における時間帯ごとの就業率を1996年と2006年と比較したものです。非正規雇用の就業率の上昇は午後6時以降に偏って生じており、特に、午後10時や深夜0時、午前3時といった深夜就

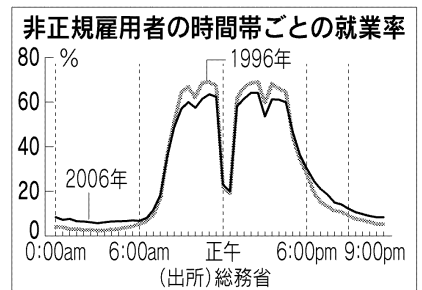
慶応義塾大学准教授 山本 勲

業化が10年間で進んだことがわかります。一方、正規雇用者については、午後6～9時頃の就業率の上昇はみられるものの、深夜や早朝の就業率の上昇はみられません。

経済が長期的に低迷する中、日本では日中の好ましい時間帯に就業できる労働者が減り、深夜や早朝の好ましくない時間帯に非正規雇用とし

## 就業時間帯でも格差

て就業する労働者が増加したとみることができます。特に、96年以降は週休2日



制の普及もあり、正規雇用の平日の残業時間が増えました。その結果、仕事を終えて帰宅する時間帯が遅くなり、その時間帯に交通サービスや飲食、小売業といった各種の財・サービスへの需要が増えました。そうした需要増加に対応するために非正規雇用の就業機会が増加したと考えられます。正規・非正規間の格差が、働く時間帯でも生じていることは注目に値するといえるでしょう。